

ほく しん ななめ

# 北辰斜にさすところ

2007(平成19)年11月9日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本・製作＝神山征二郎／製作＝廣田稔／原作・脚本＝室積光『記念試合』(小学館刊)／プロデューサー＝鈴木トシ子／出演＝三國連太郎／緒形直人／林隆三／佐々木愛／和田光司／林征生／笹村浩介(特別出演)／清水美那／大西麻恵／波岡一喜／神山繁／北村和夫／織本順吉／滝田裕介／土屋嘉男／坂上二郎(東京テアトル配給／2007年日本映画／111分)

## 第4章

現実から目をそむけるな!

……この映画は、私もよく知っている大阪の廣田稔弁護士の「伝えたい志がある。残したい想いがある」との熱い心を、神山征二郎監督が真正面から受け止めた結果生まれた珍種……？ かつて日本には旧制高等学校があったが、このタイトルはその七高(現在の鹿児島大学)の寮歌の冒頭の歌詞だ。大正15年の七高 vs. 五高(現在の熊本大学)の野球対抗戦は、ハンカチ王子こと斎藤佑樹くん人気をはるかに超えた熱狂ぶりだったが、その挙げ句……？ さて、85歳の主人公を軸とした「百周年記念試合」をめぐる人間模様は、今の若者たちにどんな教訓を残すことができるのだろうか……？ 70歳以上の先輩諸氏はもちろん、多くの若者たちに観てほしい映画だが……。

### あの廣田稔弁護士が……

この映画の試写の案内を見て驚いたのは、この映画の発起人であり、映画「北辰斜にさすところ」製作委員会会長が、私もよく知っている大阪の廣田稔弁護士だったということ。1946年10月生まれの彼は、1949年1月生まれの私の2年先輩だが、弁護士の期としては私が26期で彼が29期だから3つ下。それは、彼が鹿児島大学を卒業後、国家公務員試験に合格し法務省保護局で2年間官僚の仕事をしていたため。現在の彼の事務所は私の事務所のすぐ近くにあるが、私は彼が1977年に大阪弁護士会に登録した当初から優秀な弁護士としてよく知っている。

さらに、試写室でプレスシートを受けとった時驚いたのは、プロデューサーの鈴木

トシ子氏は彼の事務所で秘書を務めている女性だということ。そこではじめて彼女と名刺交換をしたが、彼女は1985年から秘書を始め、映画製作に関しては門外漢ながら今回、廣田弁護士のサポート役として初のプロデューサーを務め、イベントやプロモーション、そして劇場ブッキングにと全国を奔走している、とのこと。私のすぐ身近にこんな形で「二足のわらじ」をはいているほぼ同年代の弁護士がいることを知って驚くとともに、大いに刺激を受けた次第……。

## 廣田弁護士の問題意識は……？

プレスシートによれば、「本作は、現代のシステム化された学校教育のあり方に疑問を抱いたひとりの弁護士の情熱から生まれた」とのこと。つまり廣田弁護士は、「人間教育のあり方として、往年の旧制高校に着目した」わけだ。

明治時代に生まれた旧制高校の特徴は、寮での共同生活。そしてその象徴は、白線帽と黒マントそして高下駄のバンカラ・ファッション。さらに、寮歌、ストーム、記念祭……。

プレスシートには、「あの熱き日々、決して忘れない……。激動の昭和を生きぬいた青春の輝き。名匠・神山征二郎が旧制高校生たちの半生を描く。』『天才的な馬鹿になれ、馬鹿の天才になれ!』あの破天荒な先輩は、そう論してくれた。旧制高校。その思い出は、いまも尽きない……。」と刺激的なフレーズを重ねながら、この映画の魅力を伝えようとしている。さらに、プレスシートのラストの1ページには「映画製作に取り組んで」というタイトルの廣田弁護士のメッセージが掲載されている。私は彼のこの問題意識に全面的に賛成。よくぞここまで踏みこんで行動したものだといふに感心するとともに感激している。

テレビではアホバカバラエティー番組が垂れ流され、映画でもテレビドラマの延長のようなテレビ局とタイアップした安易な作品が増え続けている中、こんなこだわりをもった骨太の作品に日本人は是非注目してもらいたいものだ。

## このタイトルは……？ 「巻頭言」の出来は……？

この映画の試写の案内を見て、マスコミ関係者たちもタイトルの意味を理解できた人はほとんどいなかったはず……？ もちろん私もサッパリわからないうえ、ふりがながなければまず読めないところ……。 「北辰斜にさすところ」とは、鹿児島第七

高等学校造士館の寮歌『北辰斜に』の冒頭の歌詞。

この映画の冒頭の「つかみ」は、五高に勝利したことに酔いしれたファイアーストームにおける緒形直人扮するミスター七高生こと草野正吾応援団長による大音声の「巻頭言」の吟詠。これは寮歌にはつきもので、この巻頭言の吟詠後、「アイン、ツバイ、トライ（1、2、3）」のかけ声のもと、寮歌が歌われるわけだ。したがって、冒頭の緒形の演技（声の出しっぷり）は非常に大切だが、その出来は……？ 私の目（耳？）には多少迫力不足に映ったが、現役の応援団長の方々のご意見は……？

## 学生生活、イマ昔

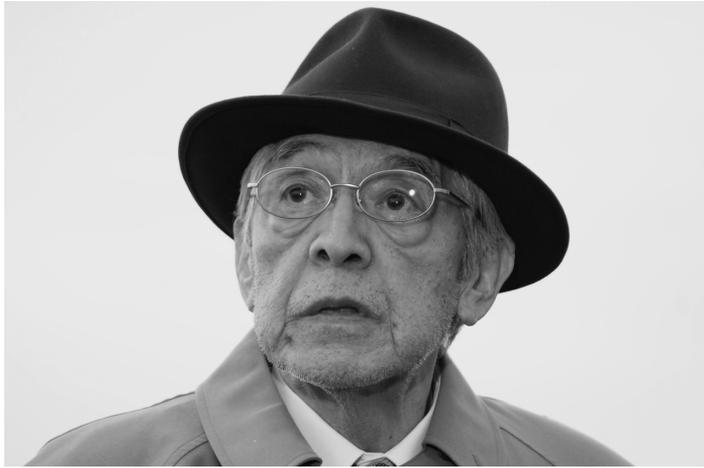
私は愛媛大学法文学部と大阪大学法学部、そして関西学院大学法科大学院等での講義を通じて、また自分の息子や娘さらにその友人たちを通して、今ドキの学生生活の状況はかなりわかっているつもり。また同時に、山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70～73年）や黒澤明監督の『わが青春に悔なし』（46年）などで、旧制高等学校や旧制帝国大学の学生生活も少しはわかっているつもり。

しかし、今ドキの学生諸君はそんな昔の学生たちの生活ぶりは全く想像がつかないはず……？ 多分廣田稔弁護士はそう考え、また神山征二郎監督もそう考えたのだろう。そこでこの映画では、スクリーンが七高時代にフラッシュバックしていくと、七高の入寮式の様子や寮生同士のストームなどのバンカラぶり、そしてごこちない初恋の姿などが面白く描かれていく。さらにちょっと押しつけがましいが、「あの時代の学生たちはよく勉強した」とのナレーションつきで、名物教授の授業を必死で聴く授業風景や消灯後1本のローソクを囲んで勉強している姿などが描かれていく。

まさに学生生活イマ昔の感があるが、さてこんなシーンが今ドキの学生たちにどの程度の影響力を持つのだろうか……？

## 河島英五の『時代おくれ』がいかにピッタリ……？

カラオケに関して私の今年の収穫は、第1に故・坂井泉水を偲んでZARDのヒット曲『揺れる想い』『眠れない夜を抱いて』『Good - bye My Lonliness』等の完全マスターと、竹内まりやの新曲『人生の扉』の完全マスター。とりわけ『人生の扉』をひっさげての、10月29日の「愛声会」の懇親会におけるフルバンドをバックにした私の熱唱は、今年最大のニュース。



©2007映画『北辰斜にさすところ』製作委員会

そんな私だが、昨年の愛声会で歌ったのは河島英五の『酒と泪と男と女』。この選曲は一般の人にポピュラーな曲をという基準に則ったものだったが、実は河島英五の曲で私が一番好きなのは『時代おくれ』。「一日二杯の酒を飲み さかなは特にこだわらず……」で始まる歌詞はまさに私の思いにピッタリ。

この映画は、それよりももっとも昔の旧制高校の時代、とりわけ大正15年7月12日の七高 vs. 五高対抗の野球戦から生まれたドラマをテーマとした映画だが、感覚的にはまさに河島英五のこの曲がピッタリ……？

## ネット上に情報が満載

ハンカチ王子こと斎藤佑樹投手の登場によって昨今、早慶戦の人气が沸騰しているが、立教大学の長嶋茂雄、法政大学の江川卓など超有名スターが出現した時の東京六大学野球は、多くの野球ファンもよく知っている。しかし、九州の鹿児島大学（七高） vs. 熊本大学（五高）の宿命の対決と言われても、私を含めて多くの日本人は知らないはず……。

七高と五高との野球戦は明治39年に始まったと言われているが、大正15年7月12日の対抗戦では、両校応援団の乱闘事件にまで発展したらしい。その様子は、この映画の冒頭にナレーション付きで描かれているが、ネットを調べればその情報が満載だか

ら、興味がある人は是非調べてもらいたい。

この乱闘事件によって対抗戦は以降中止のやむなきに至ったが、それが復活したのは昭和21年とのこと。これらの詳細についても、山口宗之先生（七高造士館文科昭和20年入学・九州大学名誉教授・久留米工業大学名誉教授・文学博士）の「ああ若き日の栄光は一七高時代回顧―」が「五高・七高野球戦の復活―肥後の嵐」（ブログ）に転載されているので、興味ある方は是非参照を……。

## 主人公は……？

この映画の主人公は、東京の郊外で開業医を営んでいた上田勝弥（三國連太郎）。彼はかつて七高のエースとして五高を3年連続で完封した伝説のエース上田兄弟の兄。病院は今息子の勝弘（林隆三）が継いでいるが、「蛙の孫は蛙（？）」で、孫の勝男（林征生）は甲子園を目指してエースとして活躍中。

そんな勝弥のところに2001（平成13）年夏、七高OBの本田（神山繁）が同窓会の会報の取材で訪れた。さらに、本田は同窓会委員の海路（北村和夫）、真田（坂上二郎）と共に、「七高野球部創設百周年記念試合」への出席要請に訪れた。勝弥は取材には孫の勝男を同席させて丁寧に応じたが、「百周年記念試合」にはなぜか出席できないと回答。さて、それはなぜ……？

## 「百周年記念試合」企画は……？

他方、おじいちゃんの武勇伝を聞いたためかどうかは知らないが、孫の勝男は突然志望大学を、東京の大学から鹿児島大学に変更。これはどうも、「百周年記念試合」への出場に焦点を合わせているらしい。そして2002（平成14）年11月、ついに「百周年記念試合」の火蓋が切って落とされた。もちろん試合をするのは現役の鹿児島大学と熊本大学の野球部員たちだが、それを必死で応援するのは前夜祭でタンマリと酒を飲み、英気を養った70～80歳のじいさんたち。当初選手たちは「今日の主役はじいさんたちだから、俺たちはケガをしないように軽く流そうぜ」と言っていたものの、1対1の同点のまま試合が推移する中、雰囲気は一変し、互いの大学の面子をかけた真剣勝負に……。

もちろん応援するじいさんたちは必死。こうなりゃ、きっとこの映画を観ているたくさんさんのじいさんも必死……。なぜなら、上映終了後出口では「良かった、良かった」

た」「涙が出てきた」というじいさんたちの声がしきりだったから……。

## 同窓会アレコレ

この映画の主人公上田勝弥は85歳という設定だから、その後輩たちも70～80歳のじいさんばかり。勝弥がずっと七高の同窓会に出席しなかったうえ、今回の「百周年記念試合」への出席も断ったのは、特攻で戦死した5歳年下の弟勝雄（笹村浩介）へのこだわりがあるため……？ さらに、勝弥の先輩で、勝弥の寮生活をはじめ、生き方全体に大きな影響を与えたミスター七高こと草野正吾も戦死していた。

このように、彼らはあちらをみてもこちらをみても戦死してしまった親友がゴロゴロいるのが当然の世代だから、2002年の今まで生き残っているじいさんたちが何十年ぶりに顔を合わせれば、懐かしさに涙があふれてくるのは当然。団塊世代の私は今58歳だが、最近では愛光中学・高校の9期生の集まりによく出席している。また、2007年4月には大阪大学法学部の同窓会である「青雲会」の副会長に就任したため、それ以降は青雲会の企画によるさまざまな会合に出席し、阪大法学部に少しずつ愛着を覚えているところ。

団塊世代の私ですらそうなのだから、それより1回りも2回りも上の世代であれば、昔を懐かしむ気持はなお一層のはず。「百周年記念試合」を行う球場が、鹿児島と熊本とのほぼ中間だということで熊本県の人吉市にある川上哲治記念球場に決まったのは、熊本勢の策略(?)だったようだが、前夜祭に人吉市のホテルに集まったじいさんたちの顔のうれしそうなおこと……。

## 神山征二郎監督なればこそ

私が最近興味深く読んだ本が、斉藤守彦著『日本映画、崩壊—邦画バブルはこうして終わる』(2007年・ダイヤモンド社)、『北辰斜にさすところ』との対比でとくに共感したのは、第4章『『企画の保守化』の引き金になるものとは?』(82頁参照)。つまり、「どうしても『映画にすべき題材』は、最大公約数的で知名度があるものが有力になってくることは否めない」ため、「ベストセラーになった出版物や雑誌で人気を得ているコミック、あるいはテレビで放映されて高視聴率をマークしたドラマ、著名な映画の再映画化」に偏っていくという警告だ。現に最近の邦画を観ていると、その手の作品ばかりが続いている。

そんな中、この『北辰斜にさすところ』は全く異質の映画で、前述の廣田弁護士の熱い情熱がなければ絶対映画化できなかったもの。またプレスシートによれば、廣田弁護士と神山監督との出会いと決断、そして神山監督による、もし出演拒否なら映画化自体を諦めるという決意をもつての三國連太郎への出演依頼とそれに対する快諾の様子が「製作ノート」の中で解説されているが、このような神山監督の努力がなければこの映画は誕生しなかったはず。

『北辰斜にさすところ』は神山監督の25本目の作品になるとのことだが、私が最近観て感心したのは『草の乱』(04年)、『シネマルーム6』181頁参照)。また、25本のうち13本が戦争に関係する題材で、筋金入りの反戦派監督と表現されている。そんな神山監督なればこそ、近時の邦画には珍しいこんな映画が誕生したわけだ。

70歳以上の先輩諸氏はもちろん、多くの若者たちに是非この映画を観てもらいたいものだ。

2007(平成19)年11月14日記

テレビタレントから大阪府知事選挙に出馬する弁護士もいれば、教育の現状を憂え「伝えたい志がある、残したい想いがある」と熱い心を映画製作に向けた廣田総弁護士のような人もいる。一見奇妙なタイトルは、彼の出身校第七高等学校造士館(現鹿児島大学)の寮歌の巻頭言だ。そこで、まずは映画冒頭の大音声に注目！

大正十五(一九二六)年七月十二日の七高V

## 嗚呼、青春！老いも若きも語ろうぞ！



ほく しん ななめ  
北辰斜にさすところ

あすからテアトル梅田で公開



©2007映画『北辰斜にさすところ』製作委員会

S五高(現熊本大学)に学力低下は深刻で、教育再生は国家的な焦りに我は泣き、我が喜は応援団同士の乱闘事件に発展した。そして平成十四(二〇〇二)年の現代、白髪の老人と論ず先輩が登場する。神山征二郎監督は見事に描いていく。

マウンドに立つのは旧制高等学校の名物は寮での共同生活と壘孫の世代、それに熱いカラな生き方、そして声援を送るOBたちだ。白線帽と黒マント、高が、「あの戦争」による下駄ファッション。彼つて英霊となった先輩らは自由を謳歌しつつの姿は球場にはない。よく勉強し、生涯の友そんな先輩たちの悲し情を培ったらしい。名目を乗り越えながら、物教授の授業、消灯後記念試合が今始まった。のローソクを囲んだ。

大阪日日新聞2008(平成20)年1月4日